

兵庫県文化財調査報告 第28冊

養久山42・43号墳

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 Ⅲ—

1985.3

兵庫県教育委員会

養久山 42・43号墳

— 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ —

正誤表

頁	行	誤	正
図版目次	図版18下	攪乱壙検出前	攪乱壙検出後
14	8	cmと	mと
14	30	第11図 土器棺検出状況	第11図 養久山42・43号墳遠景
32	11	きた。養久山42号墳	きた。養久山42号墓
図版18下		攪乱壙検出前	攪乱壙検出後

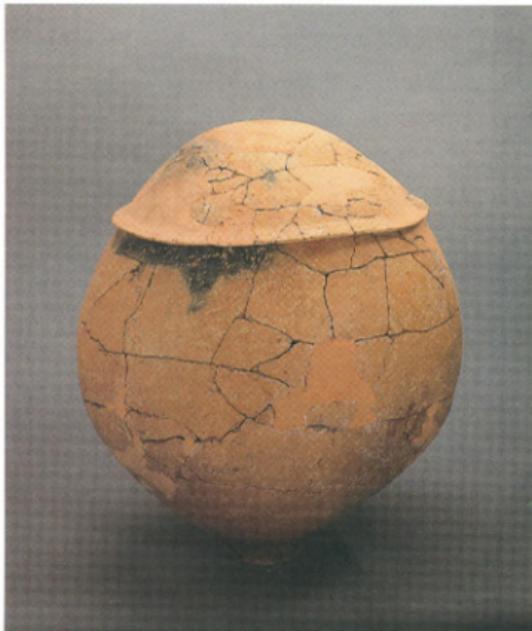
兵庫県文化財調査報告 第28冊

養久山42・43号墳

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 III—

1985.3

兵庫県教育委員会



土器館の土器

例 言

1. 本書は、龍野市揖西町佐江字乙城山、同小神字前山に所在する養久山42号墳ならびに龍野市揖西町佐江字乙城山、揖保郡揖保川町半田字前山に所在する養久山43号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。発掘調査は、昭和57年10月20日～12月7日の20日間を2基の古墳の伐採と測量と確認調査、そして養久山42号墳の全面調査を行った。翌昭和58年4月18日～5月23日の19日間を養久山43号墳の全面調査に費した。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課主任井守徳男、技術職員 渡辺 昇・村上賢治が担当した。
4. 本書で示す標高値は、日本道路公団設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構写真は、調査員が撮影した。航空写真は、日本産業航空株式会社ならびに国際航業株式会社に依頼した。図版4の上空写真は国土地理院撮影のものである。
6. 整理作業は、昭和59年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所と山陽自動車道現場事務所で実施した。
7. 遺物の写真は、森 昭氏に依頼し、撮影して戴いた。
8. 執筆は、Ⅳ-5を小林正人が、その他を渡辺が行った。
9. 本報告にかかる遺物およびスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）で保管している。活用されたい。



第1図 龍野市・掛保川町の位置

本文目次

例　　言

I は　じ　め　に

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	2
3. 調査日誌抄	4

II 位　置　と　環　境

III 養久山42号墳の調査

1. 位　　置	11
2. 外　　形	14
3. 主　体　部	
(a) 第　1　主　体	14
(b) 第　2　主　体	18
4. 出　土　遺　物	18
5. 小　　結	22

IV 養久山43号墳の調査

1. 位　　置	24
2. 外　　形	24
3. 扰　乱　墳	27
4. 出　土　遺　物	28
5. 小　　結	31

V お　わ　り　に

挿図目次

第1図	龍野市・揖保川町の位置	
第2図	調査風景	4
第3図	養久山から見た揖西平野	5
第4図	調査風景	5
第5図	タ	6
第6図	古墳の位置と周辺の遺跡	8
第7図	養久山42・43号墳上空写真	10
第8図	養久山42・43号墳遠景	11
第9図	養久山42・43号墳の位置	12
第10図	地形測量図	13
第11図	土器棺検出状況	14
第12図	墳丘測量図	15
第13図	土層断面図	16
第14図	第1主体実測図	17
第15図	第2主体実測図	18
第16図	土器実測図(1)	19
第17図	タ (2)	20
第18図	棺身内面の製作技法	20
第19図	養久山42・43号墳の位置	24
第20図	土層断面図	25
第21図	墳丘測量図	26
第22図	墳丘北側堆積状況	27
第23図	擾乱墳実測図	27
第24図	土器出土状況	28
第25図	土器実測図(1)	28
第26図	タ (2)	29
第27図	土器出土状況	29

表 目 次

第1表	養久山42号墳出土土器観察表	21
第2表	養久山43号墳出土土器観察表	30

図 版 目 次

巻頭図版	土器館の土器	
図版1	上	養久山全景と揖保川
	下	養久山42・43号墳遠景（西上空から）
図版2	上	タ （南東上空から）
	下	タ （東上空から）
図版3	上	養久山42号墳全景
	下	養久山42号墳第1主体全景
図版4	養久山周辺上空写真（国土地理院撮影）	
図版5	養久山42・43号墳上空写真	
図版6	上	養久山42・43号墳遠景（北西から）
	下	タ （北西から）
図版7	上	タ （北東から）
	下	タ （東から）
図版8	上	タ （西から）
	下	タ （西から）
図版9	上	養久山42号墳調査前
	下	タ
図版10	上	養久山42号墳北側畦畔断面
	下	タ 墳丘
図版11	上	タ 墳丘
	下	タ 墳丘

図版 12	上	養久山42号墳第1主体検査前
	下	タ 第1主体横断面
図版 13	上	タ 第1主体全景
	下	タ 第1主体断面
図版 14	上	タ 主体部の位置関係
	下	タ 第2主体
図版 15	上	タ 第2主体
	下	タ 第2主体
図版 16	上	タ 第2主体
	下	タ 第2主体
図版 17	上	養久山43号墳畦畔断面
	下	タ 墳丘
図版 18	上	タ 撥乱検査前
	下	タ 撥乱検査前
図版 19	上	タ 全景
	下	タ 全景
図版 20	上	タ 西側畦畔断面
	下	タ 墳裾溝堆積状況
図版 21	上	タ 周溝土器出土状況
	下	タ 周溝土器出土状況
図版 22	上	タ 周溝土器出土状況
	下	タ 周溝土器出土状況
図版 23		養久山42・43号墳出土土器
図版 24		養久山43号墳出土土器

I はじめに

1. 調査に至る経緯

山陽自動車道は、吹田市を起点とし、山口市に至る高速道路で、総延長430kmを測る高速自動車道である。兵庫県下では神戸市北部で中国縦貫自動車道と分かれ、三木市・加古川市などの東播地域から姫路市に入り播但連絡道路と交差し、夢前町・龍野市・相生市・赤穂市を経て岡山県備前市へ抜けて行く。現在、龍野西インター・チャンジ・備前インター・チャンジ間25.3kmが供用している。当然、東西両方とも計画は進められ、工事は実施されつつある。

山陽自動車道の東進とともに、事前調査として埋蔵文化財の調査が実施されてきた。基本計画決定後の幅広の広範囲の分布調査を皮切りにして、具体的に路線発表があってからの路線内詳細分布調査が行われてきた。養久山42・43号墳は明瞭な墳丘を持たず、樹木・下草が繁茂した状況では確認は困難であった。

しかし、墳丘墓の例が増え、遺跡数が増加するとともに地形や立地条件から遺跡の存在を推定することも可能となった。その一人として、当時地元揖保川町在住の岸本道昭氏（現・大阪府教育委員会）によって周辺の分布調査が広く行われ、養久山42号墳も古墳（墳丘墓）の可能性ありと指摘された。それまで養久山主尾根と南へ延びる支尾根には古墳が立地することは知られていたが、北尾根にはないものと思われており、集団関係を考える上にも大きな収穫となつた。それを受け現地を踏査したところ、墳丘墓の可能性はあるものの断定は出来なかつた。養久山墳墓群として、とりあえず確認調査を実施するよう協議の俎上に乗せられた。

基本計画のあった昭和48年度以降、日本道路公団と県教育委員会の間で協議が続けられてきたが、分布調査を除いて昭和53年度から現地調査を開始した。相生市・ツブレ池古墳、南山散布地を皮切りに緑ヶ丘古窯跡群、堂山遺跡、大陣原古窯跡群、笠田古墳などが昭和56年度までに調査を終了し、昭和57年3月には、龍野西インターまでが開通している。

引き続き、昭和57年度も2パーティ（4人）を投入して龍野西インター以東の山陽自動車道の調査を実施することとなった。養久乙城山（養久山40・41号墳）、熊子向イ山などとともに養久山42号墳も確認調査を行うこととして1982年10月20日に、伐採作業から実施した。伐採した木をかたづけるのと平行して、地形測量を行った。尾根上には、低墳丘の古墳以外にも養久乙城山遺跡で検出した弥生時代の住居跡などの遺構の存在も考えられるので、伐採範囲を尾根上全域に広げた。

鞍部にマウンドと思われる高まりを認めたので、地形測量の対象面積を広げた。明らかに墳丘と確認できたので、養久山43号墳と命名した。

養久山42号墳から南に尾根上に1.5m幅のトレンチを設定した。養久山42号墳は、墳丘があり墳頂部分も削られ力が加えられている。小片ながら土師器片も出土し、古墳初頭頃の墳丘墓として全面調査へと移行した。42・43号墳以外は、古墳をはじめ何の遺構もなく、調査は2基の古墳が対象となった。しかし、調査日程の都合で、昭和57年度には42号墳だけ調査を行い、43号墳は昭和58年度の事業とすることになった。

昭和57年度は、10月20日に作業をはじめ12月4日に養久乙城山遺跡とともに現地説明会を開催したのも断ち割り作業を行い、12月7日に42号墳の作業を終了した。

昭和58年度は、1983年4月18日から5月23日まで43号墳の調査を行った。簡単な伐採作業から手掛け、5月25日航空写真を撮影して養久山42・43号墳の調査は、延39日、延413人の作業員の方々の協力を得て無事調査を終了した。

2. 調査の組織

発掘・整理調査とともに、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。昭和57年度に確認調査と養久山42号墳の発掘調査を、昭和58年度に養久山43号墳の発掘調査を、昭和59年度に両墳の整理調査を行った。

(1) 昭和57年度発掘調査の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課長	藤本繁
文化財担当参事	吉村芳郎
副課長	道畠實
課長補佐	池田義雄
タ	堀洋
埋蔵文化財係長	大村敬通
主任	西口和彦
タ	小川良太
技術職員	水口富夫
事務職員	杉本恵子

調査担当　社会教育・文化財課

技術職員	渡辺昇
タ	村上賢治

調査参加者

吉田一夫、吉田 勝、吉田政信、西田數美、吉本三四二、前田真吾、小林静雄、西田あやの、吉田可づ子、横田美勇子、出羽 操、丸山みつぎ、井上和代、利根由扶子、赤松千恵子、出田敬子

調査協力者・機関

松本正信、加藤史郎、長石正道、志水豊章、市村高規、岸本道昭、堀本依子子
龍野市教育委員会、揖保川町教育委員会、揖保川町文化センター

(2) 昭和58年度発掘調査の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課長	西沢 良之
文化財担当参事	大西 章夫
副課長	森崎 理一
課長補佐	池田 義雄
管理係長	福永 慶造
埋蔵文化財調査係長	樋本 誠一
主任	八家 均
技術職員	大平 茂
事務職員	杉本 忠子

調査担当　社会教育・文化財課

主任	井守 徳男
技術職員	渡辺 昇

調査参加者

吉田一夫、吉田政信、吉本三四二、前田真吾、小林静雄、西田あやの、吉田可づ子、出羽操、丸山みつぎ、赤松千恵子、出田敬子、横田久美

調査協力者・機関

長石正道、志水豊章、堀本和秀、市村高規、岸本道昭
揖保川町教育委員会、龍野市教育委員会

(3) 昭和59年度整理調査の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課長　西沢 良之
文化財担当参事　大西 章夫
副課長　森崎 理一
課長補佐　和田 富夫
管理係長　小西 清
埋蔵文化財
調査係長　樋本 誠一
主査　坂本 豊明
技術職員　大平 茂
タ　森内 秀造
事務職員　杉本 恵子

調査担当　社会教育・文化財課

技術職員　渡辺 異
調査補助員　小林 正人（鳥根大学法文学部）

調査参加者

赤松千恵子、出田敬子、井上和代、金治美香、西尾知恵子、山根実生子、西上知子、小川真理子

3. 調査日誌抄

昭和57年10月18日（月）～11月4日（木）
龍子長山1号墳と調査併行。断続的に伐採、
伐採木のかたづけ。斜面が急なため簡単な道
作り。

11月8日（月）曇り時々晴れ
尾根上の落葉など清掃。43号墳を新たに確
認。伐採範囲広げる。

11月17日（水）曇り一時小雨
尾根稜線を主軸にして杭打ち。5mの方眼
を作る。43号墳東側伐採。

11月18日（木）晴れ
42号墳および周辺地形測量。地形図からは

墳丘を明らかに出来ない。43号墳東側伐採。

11月19日（金）晴れ時々曇り

43号墳西側伐採。全域の落葉・枯木などを清
掃。42・43号墳調査前の写真撮影。

11月24日（水）晴れ

地形測量を行うが強風のため中途で中断、



第2図 調査風景



第3図 麦久山から見た掲西平野



第4図 調査風景

尾根上にトレント設定。確認調査開始。42号墳近くで、地山の掘り込み確認。埋土は悪いが木棺の可能性もあるので、全面調査の範囲を南へ5m拡張。南北約20m。東西約18m。

11月25日（木）晴れ

42号墳周辺地形測量。十字に駐畔を設け南側から掘り始める。43号墳杭打ち。

11月26日（金）晴れ

43号墳地形測量。42号墳表土除去作業継続。土器片出土。

11月29日（月）晴れ

表土除去継続。周辺は地山が出始める。墳丘予想以上に残存。墳裾に黒色土あり、溝かと思われる。検出前の写真撮影。

11月30日（火）晴れ

表土除去終了。南側の周溝状掘り割り、駐畔を残して掘り下げ。浅く、断面も不定形。底部を再成形した臺の比較的大きな底部の破片出土。

12月1日（水）晴れ

十字の駐畔を残した状態で全景写真撮影。駐畔も個々に撮影。土層断面実測後除去開始。西側駐畔下で土器棺検出。平坦面の端に寄っている。

12月2日（木）晴れ

平坦面清掃。前日検出した土器棺以外の主體部検出作業。中央に大きな土の変化があったが、下げるにすぐに地山が出る。再清掃す

ると、土器棺近くで砂利多く見られる土壤と、北側で長さ2.9mの不定形の遺構確認。土器棺写真撮影。平面図作成。棺上部の落ちた状況と思われたので取り上げ、棺身を出す。写真撮影後、断面図作成。

12月3日（金）

木棺横断の駐畔残して掘り下げ。棺の痕跡確認。河原石が埋土内に入っている。横断観察すると黒色土がレンズ状に見られる。

12月4日（土）晴れ

木棺横断土層図作成後除去。古墳全景写真撮影。午後2時から麦久乙城山とともに現地説明会実施。180名余参加。

12月6日（月）晴れ時々曇り

木棺撮影。木棺・土器棺ともに断ち割りを行う。

12月7日（火）晴れ

木棺実測。木棺・土器棺を断ち割った断面写真撮影。墳丘測量を行う。今年度の調査、航空写真を除いて終了。シート敵重にかける。

昭和58年2月22日（火）晴れ

シート剥がし全体清掃。航空写真撮影。

昭和58年度

昭和58年4月18日（月）晴れ

43号墳周辺の伐採木かたづける。発掘用器材を龍子向乙山から運ぶ。

4月20日（水）晴れ

調査前の写真撮影。十字に駐畔設定。42号



第5図 調査風景

墳と同じ杭を使用。調査範囲は20m四方とする。北側から表土除去。

4月21日（木）晴れのち曇り

表土除去継続。須恵器片出土。42号墳とは時期が異なること判明。

4月25日（月）晴れ

表土除去終了。2層目に入る。北側尾根上陸構築のように見えていたが、砂が堆積しており、掘り下げ可能。

4月26日（火）晴れ

砂は堆積土で、それを取ると墳丘面と思われる粘性を持つ黄褐色土現われる。

4月27日（水）曇りのち晴れ

前日に引き続き真夏日の暑い一日。南北畦畔の断面写真撮影。東西畦畔とともに実測。墳丘全体清掃し撮影。

4月28日（木）曇り

畦畔除去後、全体清掃。墳丘写真撮影。

5月9日（月）晴れ

墳丘測量後、同じ位置に十字に畦畔設け掘り下げる。

5月10日（火）晴れ

東側墳裾から須恵器片多く出土。原位置の可能性高いので置いておく。周溝あるかもしれない。黒色土が存在し、その上から土器出土。上面は比較的の平坦。

5月11日（水）晴れ

墳裾部分、南側は須恵器粗であるが北方へ

は密に出土。口縁部もあり、破碎した原位置のように思われる。畦畔断面検討後、土層断面実測。畦畔除去後、平坦面清掃し主体部確認。円形の土壤認めたが、径が小さく土器棺か擾乱壙と思われる。

5月12日（木）晴れ

円形の土壤は方形のものを切っている。写真撮影後、畦畔を3本設けて下げる。50cm位で地山となる。埋土や堆積状況・無遺物の点から主体部とは思われない。周溝掘り下げ。地山の上に黒色土堆積。下げても上と同じで北側の方が土器が多い。ただ北側は壺の破片で、南側は杯、高杯の破片が出土している。

5月13日（金）晴れ時々曇り

墳頂の方形落ち込み掘り下げ。10cm位で底となり、幅も狭いことから、やはり主体部とは思われない。畦畔写真撮影。周溝内の畦畔清掃して撮影。土層図付け加える。墳丘全景写真。

5月17日（火）晴れ時々曇り

平坦面割り付け。擾乱壙実測。十字に50cm幅で墳丘断ち割る。土層図追加。周溝割り付けし、土器出土状態も含めて実測開始。

5月18日（水）晴れ

周溝実測。エレベーション入れたのも、土器取り上げ。

5月19日（木）晴れ

平板測量。

5月20日（金）晴れ

平板測量。

5月23日（月）晴れ時々曇り

器材かたづけ。下のテントへ撤収。乙城山から遠景写真。

5月25日（水）晴れ

全体清掃。航空写真撮影。

5月26日（木）晴れ

テント解体。器材とともに次の現場である中井古墳群へ搬出。糞久山42・43号墳の調査全て終える。

II 位置と環境

養久山42号墳は、龍野市揖西町佐江字乙城山667-60、667-62-1、同小神字前山1562-1に、43号墳は龍野市揖西町字乙城山667-59、揖保郡揖保川町半田字前山1562-2に所在する古墳である。ともに養久山から北へ派生した尾根上に築造された古墳である。養久山は、古墳発生を考えるに重要な山塊で40数基の古墳、墳丘墓が造営されている。発掘調査が行われた1967年以降は、弥生時代から古墳時代への過渡期の遺跡の指標とさえ言われた代表的遺跡である。なかでも調査の行われた1号墳、2・5・12・32号墓は多くの事実を我々に与えている。

養久山山塊は、40数基の古墳、墳丘墓が確認されている。墳丘墓で構成される墳墓群と思われるがちであるが、古式前方後円墳とされる1号墳や須恵器を持つ43号墳の6世紀代まで継続して埋葬されている。また、山麓には横穴式石室も見られ、丘陵内には墳丘を認められない箱式石棺もあり、時期・性格は一律でない。主尾根中央の丘陵最高地点である標高99mの平坦面から北へ延びる支尾根には建武年間に赤松政秀の命によって築城された乙城が存在する。養久山としては弥生時代後期に墳丘墓が築かれてから古墳時代前期の前方後円墳、後期の木棺直葬や横穴式石室を内部主体とする古墳まで埋葬の場として引き繼がれ、南北朝期に山城が築城されるまで広く使われている。しかし、中心を占める遺跡は墳丘墓であることに相違ない。主尾根の長さ1.75km、支尾根上を加えても2.5km余の尾根上のみを選んで墳丘墓を構築している。眺望のきく地点を選地している点も共通している。ただ、南方正条平野を見るものと北方揖西平野を見るものの両者があり、各々方向を十分に意識して築いたものと思われる。そのためか、密集はせず十分に占地したものかもしれない。

養久山は、南西～北東を主軸とする丘陵で長さ1.75km、平均幅0.25kmの狭長な丘陵である。南西側は、鳥坂峠を隔てて三ツ塚山塊、大門の丘陵と続いており、主軸は同じくする。北東側は、町屋の水田を縫て主軸と直交させて半田山が位置している。半田山の東方から養久山東方には、揖保川が流れている。養久山21号墳の位置する尾根から最短距離で揖保川と500m離れている。山陽本線龍野駅は約1.3km南の位置関係にある。

養久山からの眺望は良く、住吉・北沢後背の山で妨げられる小丸や三ツ塚山塊で遮られる土師などを除いて揖西の平野のほとんどを可視範囲とし、北東方は半田山を通して神岡・誉田方面が、南方は正条の水田を眼下に揖保川下流域の大半を見渡すことが出来る。この視界の中には、養久山と同時期の墳墓を数多く指摘出来る。

まず、南に目を向ければ、養久山の一支尾根と考えても良いように山裾を接した赤山の尾根上に赤山墳墓群があり、さらに500m離れて独立丘陵上に神戸北山墳墓群がある。その南500m、国鉄山陽本線を越えたサンマイ山にも土器棺などが知られている。サンマイ山と同じ山塊



- | | | | | |
|---------------|--------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 義久山42・43号墳 | 6. 神戸北山東遺跡 | 11. 鳥坂古墳群 | 16. 清水遺跡 | 21. 日山遺跡 |
| 2. 義久乙城山 | 7. 神戸北山遺跡 | 12. 龍子向イ山 | 17. 野田遺跡 | 22. 中臣遺跡 |
| 3. 義久山古墳墓群 | 8. サンマイ山古墳墓群 | 13. 龍子長山古墳群 | 18. 半田山古墳群 | 23. 掛保上遺跡 |
| 4. 赤山古墳墓群 | 9. 二坂古墳群 | 14. 竹万遺跡 | 19. 景雲寺古墳群 | |
| 5. 神戸北山古墳墓群 | 10. 龍子三ツ塚 | 15. 佐江遺跡 | 20. 小神庵寺 | |

第6図 古墳の位置と周辺の遺跡

になるが、東側の宝記山、金剛山兩古墳群があり、揖保川の流れがやや東に水流を変え始め、揖保川の最大の支流である林田川と櫛現山・掘山古墳群の眼下で合流する。播磨國風土記で有紋の瀬と記された地点で、現在でも両川の水質が全く異なることから水の混わりが明らかであり、大雨の時などは風土記の時代を彷彿とさせる。

東方から北東方にかけては、揖保川と旧小字莊、弘山莊、船莊と呼ばれた水田地帯を通して縁辺部にあたる山塊上に墳丘墓が見られる。南から明神山、篠山、片山東山の各墳墓群がそうである。明神山は箱式石棺、土器棺などが確認されている。箱式石棺からは人骨以外にこの時期としては珍しく副葬品が入れられていた。鉄刀と鉄劍で、石棺内面には朱が塗布されていた。土器棺は器房40cm弱、最大腹径41cmの大形の壺で胴部下半に穿孔の見られる完形品である。片山東山も箱式石棺と土器棺を確認している。

これら3遺跡は養久山42号墳からは眺望出来るが、主尾根丘に占地している1号墳をはじめ2・5号墓などからは、片山東山墳墓群しか見ることは出来ない。

北東方向から北方へかけての揖保川より西の揖西平野の北縁の丘陵にも、多くの遺跡が存在している。白鷺山墳墓群は、後漢鏡を出土したことでも良く知られている。2基の箱式石棺が不時発見され、ともに鏡を副葬していた。1号館は「位至三公」「金石如壽」の銘文を持つ内行花文鏡と鉄劍・用途不明鉄器を保有している。後漢鏡の鏡片副葬で興味深い資料である。2号館は小形仿製鏡と手斧頭を出土している。白鷺山から西へ目を転じていくと、山根・新宮東山・池の谷の各墳墓群がある。ともに分布調査によるものであるが、土器棺などの遺構の存在は確かめられている。乙城で遅られる12号墳などからは池の谷墳墓群は視界に入らない。

養久山と白鷺山の中間に位置する独立丘陵である半田山の尾根上にも墳丘墓は築かれている。養久山42・43号墳と同様に山陽自動車道に伴って1984年に発掘調査が実施された。2基の墳丘墓と2基の古墳が調査された。1号墳（墓）は6体以上の埋葬が見られ、木棺の切り合いもあった。1号館は朱が塗られた鐵劍を副葬しており、棺上遺物と思われる中に小形仿製鏡と銅鏡がある。後の木棺の埋葬のため原位置を動かされているが、1号館の棺上遺物と思われる。上部には器台、壺などの土器も置かれており、白鷺山との関連を考えるとともに養久山との関係も赤山に次いで近い位置にあることからも十分に考えねばならない墳墓であろう。

このように養久山を中心とする揖保川中下流域、とりわけ揖西平野周辺には多くの墳丘墓が築かれており、古墳発生を考える上に重要な地域である。しかし、今のところ墳丘墓を築いた人の集落は明らかにされていない。養久山南側の32号墓下方の養久・谷遺跡と山塊北側42・43号墳北方の低地に立地する清水遺跡の2遺跡が知られているにすぎない。両遺跡とも十分に生活の場と考えられるが、養久・谷遺跡で住居址が1棟検出されているだけである。

揖西平野では、弥生末～古墳時代初頭にかけての墳墓が地域史を考える上には卓越した存在であることに相違ないが、他の時代においても当然数多くの遺跡が分布している。縄文時代後

期が当地の明らかな最古の時期である。小丸、清水、義久・谷で縄文時代後期の遺物が確認されている。

弥生時代になると、前記の3遺跡のほか、徹高地上や丘陵上に多くの遺跡が現われるが、ほとんど中期になって生活を営み始める。前期の土器を出土しているのは、義久・谷と半田山、袋尻浅谷の3遺跡である。後者の2遺跡はともに墓で、半田山では土器棺と土塙墓を袋尻浅谷では土器棺を検出している。

中期になると、遺跡は増大する。中小河川の徹高地上に立地するものとして、小丸、尾崎、佐江、清水、竹万などの各遺跡がある。丘陵上・山腹に立地するものとして、長尾・タイ山、片島、小丸遠殿跡、龍子向イ山、義久乙城山、日山の各遺跡がある。

中期に最も多くの遺跡が数えられるが、後期まで継続する遺跡は少なく、ほとんど中期のうちに消滅する。例外的なのは、義久・谷と清水で前述したように義久山の被葬者の集落の可能性の高い遺跡である。他に佐江から後期の製塙土器が出土している。

古墳時代への始動期は、義久山をはじめ多くの遺跡が見られるが、前期古墳となると龍子三ツ塚と義久山1号墳、鳥坂1・2・3号墳など三ツ塚・義久山山塊に限られる。後期の古墳は、揖西平野周縁部の山裾に築かれている。北縁の古墳群は、中垣内の24基を最高に景雲寺・小神とともに構成が多い。しかし、南縁は龍子向イ山、龍子長山など數基で構成されている。また大形墳も孤塚、中垣内1号墳で北縁に位置している。

群集墳の一段階古い古墳は、西宮山、長尾タイ山1号墳と北側にあるが、さらに遡ると特異な性格を持つ長尾・タイ山古墳群を除いて南縁に単独墳もしくはそれに近い状況として多く見られる。片島、宿福塚、鶴塚がそれである。義久山43号墳もこの時期の資料である。笠田、義久乙城山2号墳（義久山41号墳）とともに中期と後期の古墳群の間を埋める資料である。

律令期には北縁の龍野上郡断層上に山陽道が布設され、小丸・中垣内・小神と瓦出土地が山陽道沿いにあり、小丸は布勢駅かとも考えられている。

播磨国風土記の里に当てはめると、義久山の北は出水里・桑原里になる。



第7図 義久山42・43号墳上空写真

参考文献 松本正信「考古学から見た龍野」『龍野市史第一巻』1978年 龍野市役所

松本正信他「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史第四巻』1984年 龍野市役所

是川長・上田哲也他「長尾・タイ山古墳群」1982年 龍野市教育委員会

揖保川町教育委員会「義久・谷遺跡」出土遺物展パンフレット 1984年

III 養久山42号墳の調査

1. 位 置

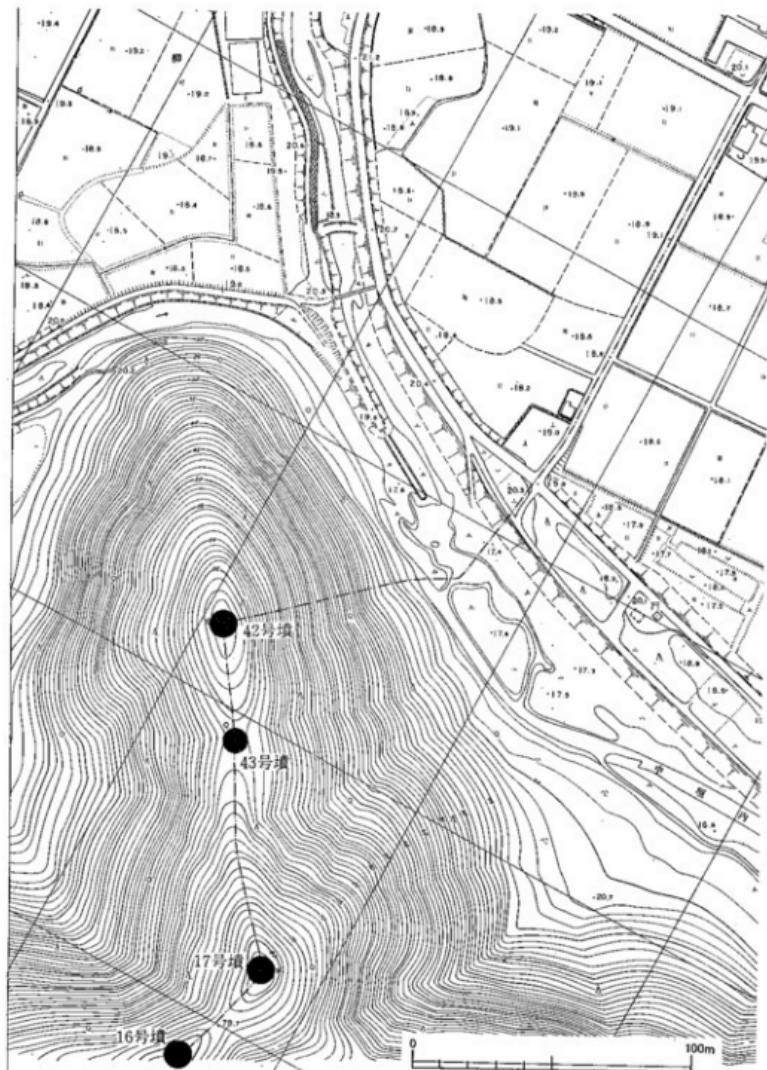
前章で触れたように、養久山主尾根から北へ派生した支尾根頂上に位置している。尾根が枝分かれする主尾根上には16・17号墳が立地している。調査が行われた1号墳や5号墓が良く知られているが、16・17号墳5・32号墓などと同時期の墳墓であろう。42号墳と16号墳とは、比高差が約13mある。主尾根から緩やかな斜面で下っているが、途中でやや急となりやせ尾根となる。再び緩斜面の下りとなり最も低い地点(64.5m)に43号墳が立地し、再びやや急な上りとなり尾根頂上に42号墳が存在している。尾根上には、2基の墳墓しか存在しない。2基は、平面で30m弱、垂直で5mしか離れていない。しかし、最も近い17号墳では、直線距離で75mと大きく離れている。2基で構成される一支群と考えた方が良いと思われる。

42号墳からの眺望は開けており、視野は非常に広い。養久山で遮られる南方面を除いて、北方面はほとんど可視範囲に含まれる。ほぼ真北の低地に養久山墳墓群の母集落の可能性が高い、清水遺跡が約750m離れて立地している。同時期の墳墓である半田山古墳群は北東に、揖保川は東方面に各々700m離れている。

42号墳は全体的に急峻な地形の頂上に立地し、東西はもちろんのこと北側も急斜面を呈しており、眼下に古子川と中垣内川の合流地点がある。水田との比高差は約51mある。



第8図 養久山42・43号墳遠景



第9図 萩久山 42・43号墳の位置



第10図 地形測量図

2. 外 形

尾根頂上に立地しているため、自然流失が著しく墳丘の残りは良好ではなかった。墳丘は最も残っている箇所でも現地表から60cm、浅いところでは数cmで地山に達した。表土を除くと、すぐ地山という状況が大半であった。墳丘の規模は、尾根筋である南北が14m、東西が12mを測る。墳形は、正しく言えば梢円形であるが、尾根上や斜面上に立地する古墳では不定形になる古墳も多く、短絡的に梢円形とは言えないだろうと思っている。

墳裾南側には、深い溝が巡らされていた。幅は最大幅2mで、尾根稜線上近くでは1~1.5cmと狭くなっている。西側は6.1mで終結しているが、北へはやや長く伸びていたものが流失した可能性は十分に考えられる。東側の溝は途中から地形と同化して溝端が判然としないが、8mの長さを測ることが出来る。稜線上は検出されず、意図的に掘っていなかったものと思われる。小規模な地山の整形ではあるが、明らかに裾丘を画するための溝であろう。外部の列石は見られなかった。

3. 主 体 部

埋葬施設は2基確認した。主体部を構築するのに際して、墳頂に約5m四方の平坦面を削り出している。側面観は、台形を呈するほど明らかな平坦面を形成している。

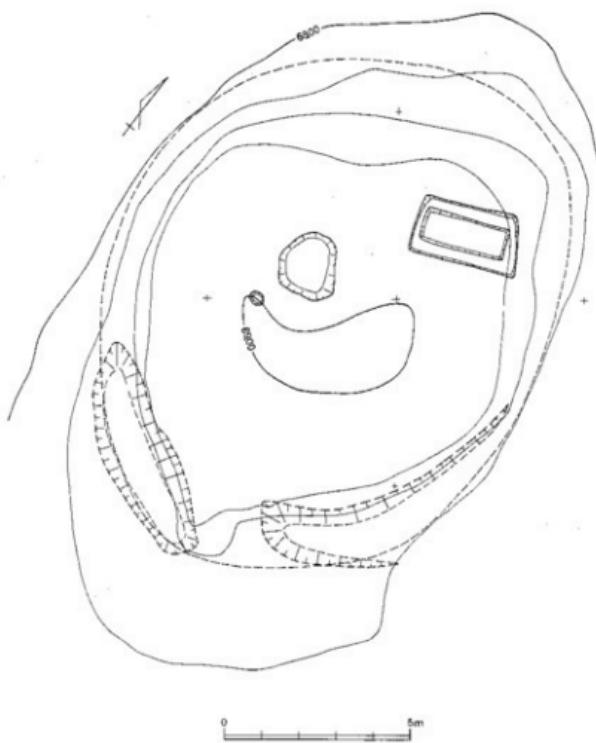
2基の主体部は並ばず、対角線の位置に存在している。平坦面の北側に第1主体（木棺）が、南側に第2主体（土器棺）が築かれている。最も近接した距離で2.9mを測る。土器棺とほぼ接するように（約10cm）不定形の土壤が検出された。土壤内からは出土遺物もなく、主体部とは思われない。ただ、境内から指頭大~拳大よりやや小さめの河原石が多く出土している。流紋岩などの礫で山裾を流れる中垣内川・古子川に見られる石である。性格は不明であるが、両主体部の間に位置する土壤で、埋葬と強く結びついた性格と考えても差し支えないと思われる。

(a) 第1主体（木棺）

平坦面の北側に位置している。平坦面の端に築かれている点から、当初より第2主体を埋葬することを企図していたものと思われる。尾根筋に直交するようにN65°Eを主軸とする東西方向に長軸を設けて構築されている。墓壙掘り方は、北側の狭い台形のプランを呈している。北辺2.4m、南辺2.8m、幅1.6mの台形に近い不定長方形プランで、深さ0.7m掘り込んでい



第11図 土器棺検出状況

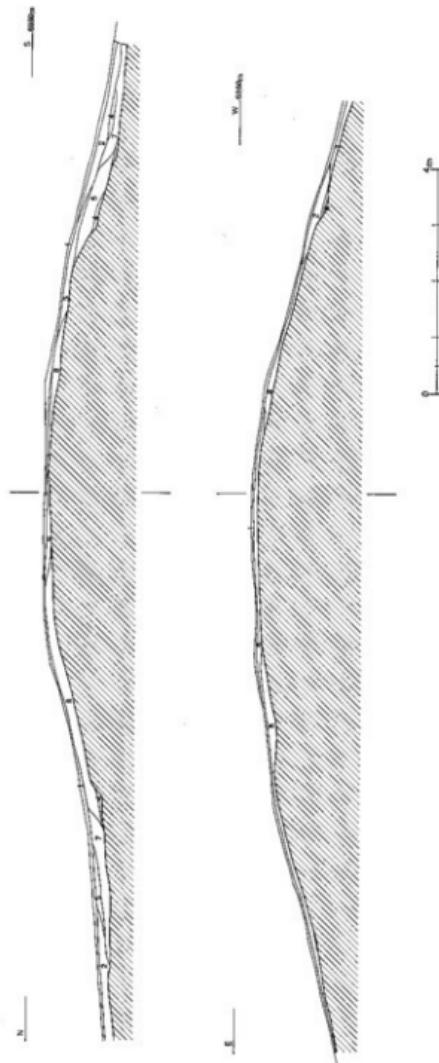


第12図 墓丘測量図

る。掘り方は、箱形に掘るのではなく緩やかな傾斜を持つU字形をしている。底は必ずしも平坦でなく凹凸も見られた。

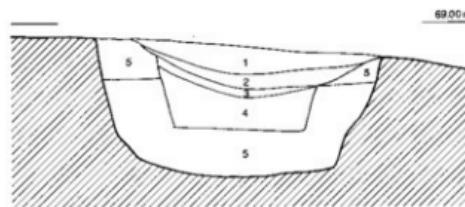
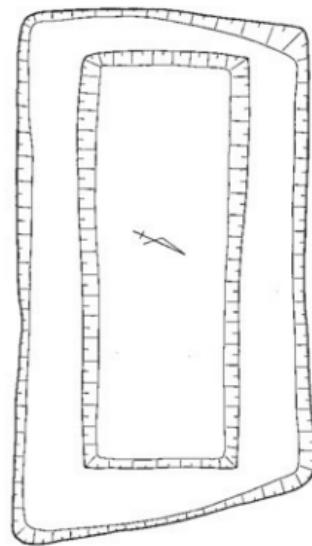
墓壇中央に木棺の痕跡を確認した。長さ2.2m、西側短辺0.9m、東側短辺0.8mの規模を測る。棺の幅が異なることから、幅の広い西側が頭位とも推測される。棺は、墓壇底から約0.2m高く、地山客土である黄褐色の砂礫土の上に置いている。理論的には、棺下の置土と棺横の埋土は層が異なるはずであるが、土層的には土が同じで識別困難であった。

主体部横断に残した鞋畔を観察すると、3層のレンズ状堆積が見られる。棺の腐朽による陷



1. 黑色土 2. 茶褐色砂質土 3. 黃褐色砂質土 4. 黑灰色點質土
 5. 黃褐色粘質土 6. 黃灰色砂質土 7. 黑灰色有機質土 8. 黃灰色粘質土

第13圖 土層斷面圖



1. 黄灰色粘质土
2. 黄灰色砂砾土
3. 黑色有機質土
4. 暗黄灰色砂质土
5. 黄色粘质土(北山客土)

0 1m

第14図 第1主体実測図

没とも考えられる。最も木の層は、黒色有機質土で棺蓋の可能性は考えられないだろうか。そうすれば、棺は0.35m程度の高さとなる。

副葬品は有さず、出土遺物も数点の土器片だけである。ただ墓壙埋土内に下を流れる古子川などで採取される河原石が含まれていた。丘陵上では見られることから平地から運ばれた円礫で、主体部内に意図的に入れていたことになる。

(b) 第2主体(土器館)

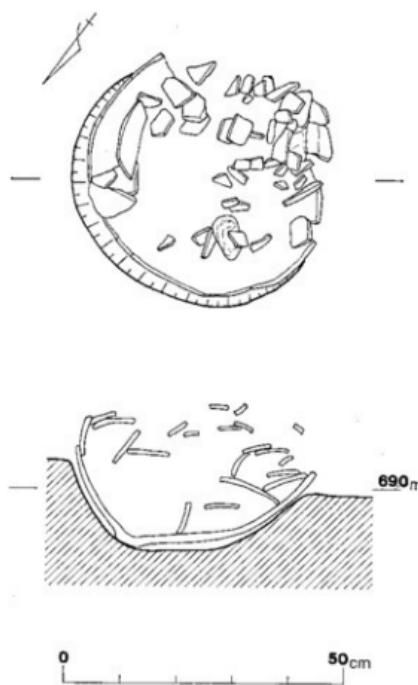
平坦面の中央より西側に偏して築かれている主体部である。直径45cm前後の不定の円形を掘り方としている。深さは10cm前後しか確認出来ず、多少は流失したものと思われるが、棺身がすっぽり入るような掘り方であったかどうかは疑問である。平坦面の地山の検出状況から考えても掘り方は浅く、

墳丘構築とともに土器館も埋められたのではと考えている。

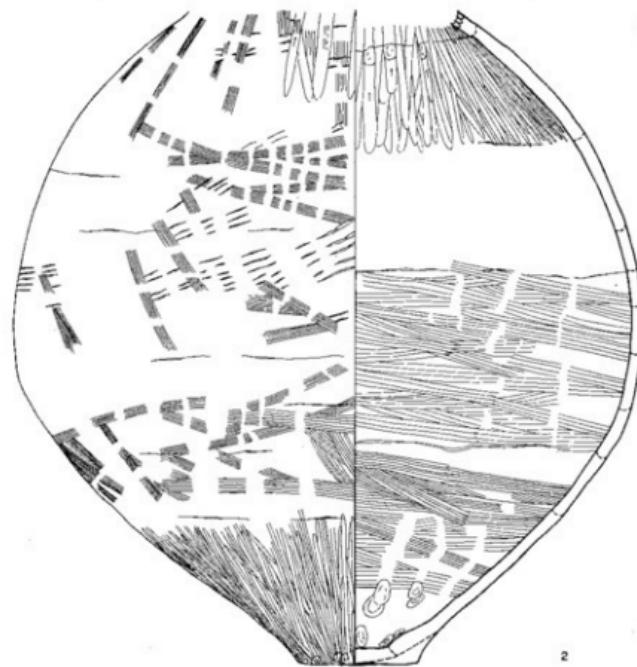
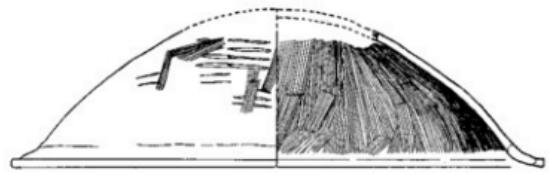
棺身は口頭部を銚成後に割った大形の壺を使っている。48cm前後の球形に近い胴部に平底を付加した壺で、赤褐色に焼き上げられた棺用かとも思われる土器である。この土器は口を西方に向へ斜めに傾けて据え置いている。急傾斜をするほど斜めではなく、30°程度斜めにしている。棺の上部は、棺内に落ち込んでいた。調査時に表土直下で土器を検出したように、上部は自然条件によって流失したものと思われる。棺内には、他の個体も混じっていた。復原してみると、大形の精製土器となつた。器種は、鉢かと思われ蓋として使用したものだろう。

4. 出土遺物

出土遺物量は少なく、土器館を除くとコンテナ1箱しかない。全て土師器である。遺構とし



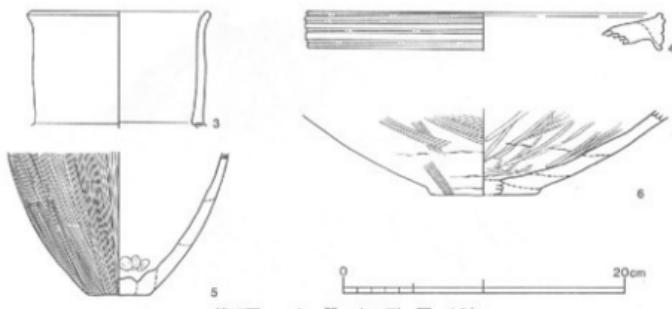
第15図 第2主体実測図



0 20cm
第16図 土器実測図(1)

て検出している土器棺以外は、墳掘振り割りや墳丘内、流土内から出土している。

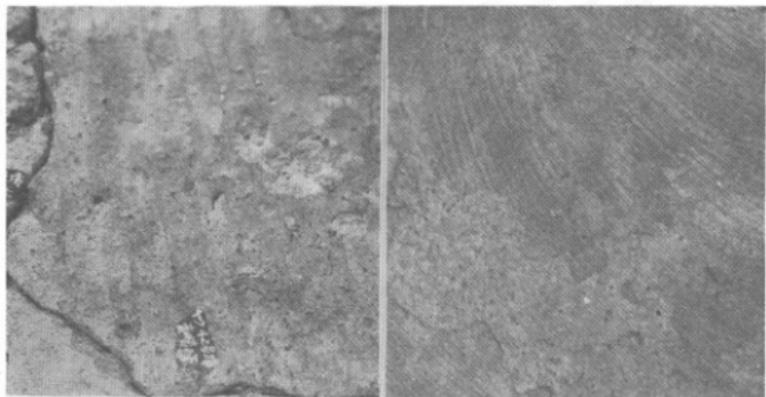
土器棺の2点は特徴的な土器である。共に一見すると非常に丁寧に仕上げられた土器に見えるが、仔細に観察すると成形痕さえ看取出来る。蓋も器壁が薄く内面は平滑に仕上げている



第17図 土器実測図(2)

が、外面は身と同様でタタキメの痕跡が残っている。2点とも棺用として特別に焼成された送葬用土器と考えられる。(1)の蓋は、棺用として焼かれた土器なら器種は蓋とすべきであろうが、プロポーションと器壁の薄さから器種は鉢とした。器形は高杯形部に似ているが、タタキメの施文と器壁の薄さから高杯とは思われない。(2)の棺身の器種は壺で、球形に近い胴部に平底を再成形した土器である。胴部上半内面の強いナデが技法的に大きな特徴であろう。整形痕を明瞭に残すという点では、粗雑な土器と言えるが、この技法は土器の時期を考える上にも留意すべき点かと思われる。

(3)は、壺の口縁部である。摩滅しているため、傾きがやや不確実であるが、直口する退化した長頸壺と考えられる。口縁端部がやや外反する。



第18図 棺身内面の製作技法

No.	器種	胎土	焼成色	調査	法量(cm)			特徴	數
					口径	底径	壁厚		
1	鉢(盃)	チャートなどの小石粒	良	内)赤褐色 外)黄褐色~茶褐色	38.0	—	9.7	内面は細かいハケ(9本/cm)を何回も施す。 口縁だけ粗いヨコナラブ外面は右上がりのタ タキのものち、ナデ・ハケで削しているが完全 でない。ヘラミガキがないがナデで代 用。粘土の焼き目明瞭。器壁薄い。	
2	壺	チャートなどの小石粒	良	器表)赤褐色 底)黒褐色 器肉)茶褐色	—	8.5	46.5	内面2種のハケ(4本/cm、6本/cm)薙す。 底部内面はハケのちナデ底部再成形のた め底近くはハケ残らない。ハケは切入痕僅 ましか見られない。底部内面は強いた めで研磨する。外面はタタキのものち2種のハ ケで整形する。ナデ・ヘラで調整。	
3	長頸壺	長石・チャートなどの 小石粒	ややせい	赤褐色	13.0	—	8.2	表面摩滅しているがヨコナラだけと思われ る。	
4	壺	チャートの砂粒	良	赤褐色~黄褐色	25.5	—	2.6	粘土の焼き目残される。口唇部以外面と も肥厚している。4条の凹線。	
5	壺	長石などの砂粒	良	外)赤褐色 底)黒褐色 内)黒褐色	—	4.4	10.1	内面はヨビ整形のまま 外面は9~10本/cmの幅かいハケ調整	
6	壺	長石・石英・チャート の小石粒	良	内)赤褐色 外)階層黄~茶褐色 器肉)黒灰色	—	8.0	6.1	内面粗いハミガキ。粘土の焼き目明らか 底部再成形のちハケ(7本/cm)整形。	

(4)は、壺の口縁部で、(2)の棺身の壺のような大形壺の口縁部である。口縁内外とも肥厚させ、口唇端面には4条の凹線を有する。

(5)は、壺の底部であるが、壺として使われたとは思われない。精製壺ではないが、外面のハケは丁寧である。

(6)は、大形壺の底部で、(2)と同タイプの土器である。粘土の継ぎ目は明らかであるが、内面はヘラミガキで調整されている。(4)の壺口縁と同一個体の可能性もある。内面の仕上げが、ヘラミガキとハケと異なっているが、この差は何を示すのであろうか。

5. 小 結

養久山42号墳は、養久山主尾根から北へ派生した支尾根頂上に立地する墳丘墓である。北側山裾に古子川が流れ、水田面との比高差は約51mある標高69.35mの支尾根頂上に占地する。尾根の東西の斜面はやや急峻な地形である。径12~14mと梢円形をした比較的低平な墳丘である。埋葬施設は2基確認している。木棺と土器棺で2基は並ばず、約5m四方の平坦面の北東と西に位置している。間に河原石を内蔵した不定形の土塊が存在している。埋葬に伴う送葬儀礼に関連のある遺構とは考えられないだろうか。木棺は、N65°Eに主軸を持つ台形プラン（北辺2.4m、南辺2.8m、幅1.6m）の墓床掘り方をもち、長さ2.2m、幅0.8~0.9mの木棺を埋納していた。横断面の畦畔に黒色有機質土がレンズ状に堆積していることが確認されており、棺蓋ではないかと考えている。深さは0.35mとなる。土器棺は、口頸部を打ち削った壺を棺身として、径45cmの墓壙に斜めに据え置いている。棺内に土器が落ちていた。棺身の破片とともに蓋に使われていたと思われる鉢の破片も含まれていた。墳裾部分には、浅いながらも明らかに墓域を画すための溝が掘られていた。尾根筋である南側に限られて掘られていたが、尾根稜線上にあたる部分だけは、溝が築かれていなかった。

養久山42号墳は、支尾根頂上に立地している。尾根頂上に位置しているため、眺望は良く、揖西平野の大半をはじめ、北～東方向は良く開けている。当墳から眺望関係にある同時期の墳丘墓を挙げると、養久山12・14・15・40号墳、半田山、池の谷、新宮東山、山根、西宮山、白鷺、片山東山、明神山、笠山、内山の各墳墓（群）、遺跡がある。

立地条件を加味して考えれば、最も似た墳墓は、養久山40号墳（養久乙城山1号墳）である。同じ養久山山塊にあり同一古墳群内にある古墳で西方500mのやはり北へ派生する支尾根頂上に立地しており、主体部も土器棺と木棺の2基と相似している。他の遺跡、墳墓のはほとんどは発掘調査が行われていないため、同一レベルで論じにくいが、立地状況からだけ見ると養久山40号墳が最も同一性が高いように思われる。

2基の埋葬施設はともに副葬品は保持していなかった。出土土器は土器棺として使われた、

2個の土器と墳裾溝内および墳丘内出土の少量の土器片だけである。しかし、これらからある程度の時期の類推は出来る。時期は、弥生末から古墳時代初頭の範囲で、畿内に相当させれば庄内式併行期と言ってよいであろう。ただ、埋葬用土器のため集落遺跡出土の土器と同一尺度では測りにくい。特に棺に使われた2点は特殊で、棺用として焼成されたのではないかと思われる。一見すると精製土器として丁寧に仕上げた土器に見えるが、仔細に観察するとヘラミガキで仕上げているように見せているが、ハケ整形はもちろんのこと、タタキメの成形痕さえ残している。土器内面もまだヘラケズリが施されておらず、新しい要素は少ない。胸部上半内面は、ニビによる整形が行われている。強いナデで、凹凸が顕著に窺われる。これら諸点を総合すると、弥生時代後期末とした方が良いかもしれない。墳裾から直口するやや頸部が短いながらも長頸壺が出土している点も古くする要素となろう。土器棺の壺は、内面ヘラケズリがなく新相を示す整形技法がないものの、器形から見ると球形に近いプロポーションに底部再成形したもので吉相は示さない。弥生後期の壺は、胸部がやや扁平に近い形態になるものと思われる。土器棺例としても、龍野市脇田町の明神山墳墓出土例のような形状を示すであろう。また、棺蓋としての鉢も内面は非常に丁寧にハケで仕上げられている。器形、技法的には高杯のそれに似ており、やはり新しい様相となろう。送葬用土器という点で同一視しにくいが、長頸壺出土の下限の弥生末（唐古45号竪穴上層式併行）以降庄内併行期の築造と考えられる。土器棺の時期は、新しい時期に求めたい。

IV 養久山43号墳の調査

1. 位 置

主尾根から北へ下る支尾根は、垂直距離で約8m下がった地点で僅かな平坦地を持ち、再び高くなり支尾根頂上の42号墳の立地する標高69.35mの地点に達し、再び下り斜面となって古子川に至る。標高64.5mの僅かな平坦地に43号墳は立地している。42号墳では、平面で30m弱、垂直で5mの数値を得る距離である。主尾根上に位置する最も近い古墳である17号墳とは直線距離では約90mと近いが、地形的には隔絶した観があり、42号墳と2基から成る支群と考えた方が妥当であろう。

眺望範囲は鞍部に立地しているため、さほど広くはない。42号墳の視界から北方を除いた東西方向が睥睨出来る。西側は、養久乙城山、尾崎遺跡から池の谷墳墓群までを範囲とする。東側は、半田山を正面に的場山から内山までを可視範囲とする。

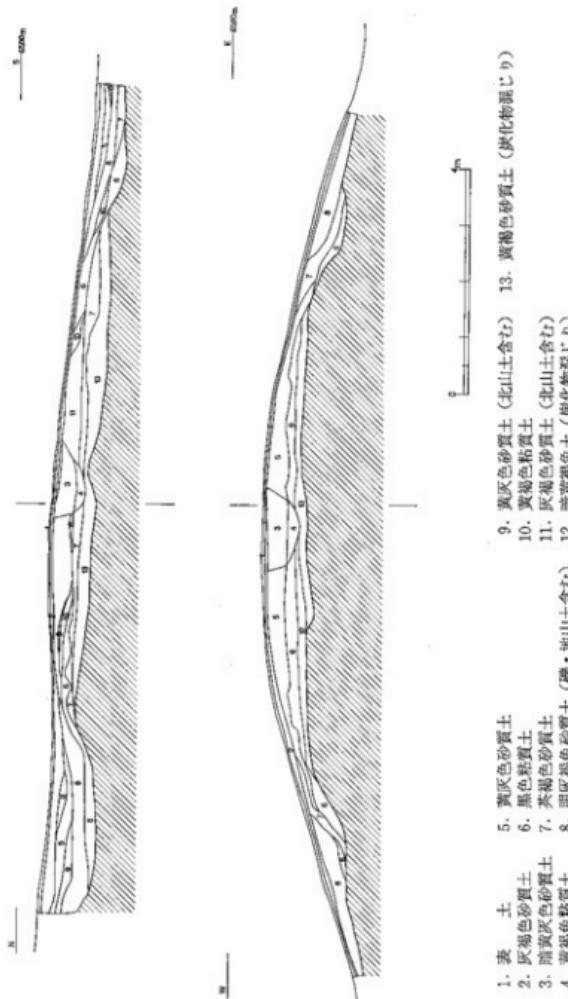
2. 外 形

鞍部に立地しているため、42号墳と比べて盛土の流失は少ないものと思われる。流土が少ないという理由もあるが、墳丘を規定しやすかった。

伐採の終る時点でのほぼ古墳の範囲は規定出来た。北側は明らかに浅い掘り割りが看取さ

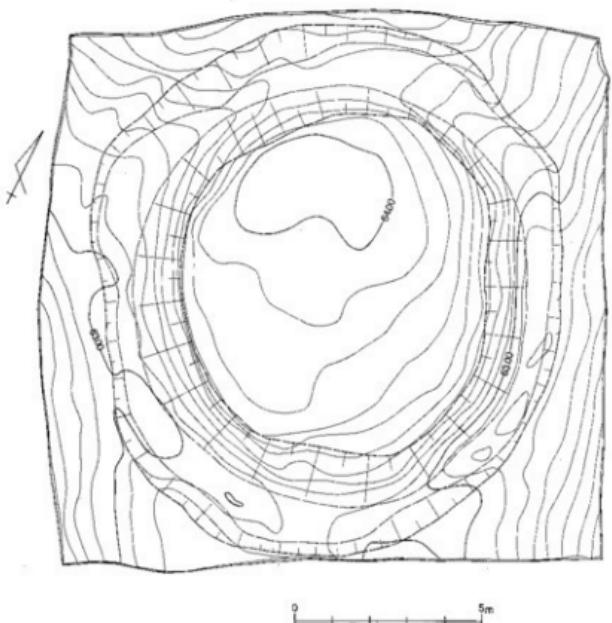


第19図 養久山42・43号墳の位置



第20圖 土層断面図

1. 黑土
2. 灰褐色砂質土
3. 開氣灰褐色砂質土
4. 黃褐色粘質土
5. 黃灰色砂質土
6. 黑色粘質土
7. 素褐色砂質土
8. 明灰褐色砂質土 (裸・地山土含む)
9. 黃灰色砂質土 (地山土含む)
10. 黃褐色粘質土
11. 水褐色砂質土
12. 淡黃褐色土 (炭化物混じり)
13. 黄褐色砂質土 (炭化物混じり)



第21図 墓丘測量図

れ、4本のコンターラインが入り込んでいた。南側は平坦面が10m近く続いているため、北側ほど墳壙は明らかでない。ただ64.25・64.50の2本のセンターは変化が認められ、北側と整合する。調査前の地形測量図では、方形に近い外形を我々に示していた。

しかし、調査が進捗するとともに南北の尾根上は土砂が堆積しており、最終的に1m近く掘り下げられた。旧墳丘面と考えられた面では角が取れ、ほぼ円墳であろうと思われ、南北に僅かに長い形状となった。墳丘面までは、表土と灰褐色砂質土が10~30cm溜まっていた。

墳丘盛土は、最も残っているところで80cmで、純粹に互層にして積んではいないが、地山土と有機質土の混ざった茶褐色土を盛っており、意識の上で2種の土を使用していたことが推定される。

墳壙に、ほぼ円形の掘り割りが検出された。幅は2~3mと箇所によって異なる。墳丘側は、0.4~1.2mと高いが、墳壙外は0.2m前後の差しかないが、明らかに掘り割りと認識出来

る溝である。北半の溝内から須恵器が検出された。須恵器大甕・壺の破片が目についたが、復原してみると、杯・高杯・壺・甕の器種が含まれていた。大甕・壺は溝内で破碎したようである。(1)の壺は、口縁部の出土状況から原位置が押えられる。出土状況から見て西から力が加えられたようである。掘り割りから墳丘規模を出すと、径11mの円墳となる。掘り割りを含めると径14mとなる。墳丘の高さは、最大値で1.4mを測る。

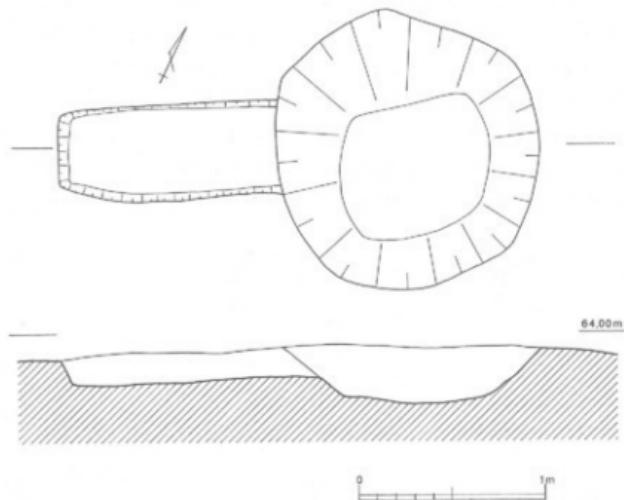


第22図 墳丘北側堆積状況

3. 掘乱墳

墳頂平坦面で主体部は確認されず、円形と方形の落ち込みを検出した。当初、土器棺かとも思われたが、掘り下げたところ2基とも浅く主体部ではなかった。

円形の落ち込みは、不定形ながら径1.4mの円形で鉢状に落ち込んでいる。深さは0.3mと底も浅く、平坦でなくいびつである。掘り込みも一律でなく、場所によって傾度は異なる。



第23図 掘乱墳実測図

方形の落ち込みは、0.5mの幅で1.2m以上の表土があり、円形落ち込みに切られている。

ともに性格不明の攪乱壙である。盜掘壙かもしれない。

4. 出土遺物

糞久山43号墳から出土した須恵器は、有蓋高杯の蓋部と考えられる杯蓋が4例、有蓋高

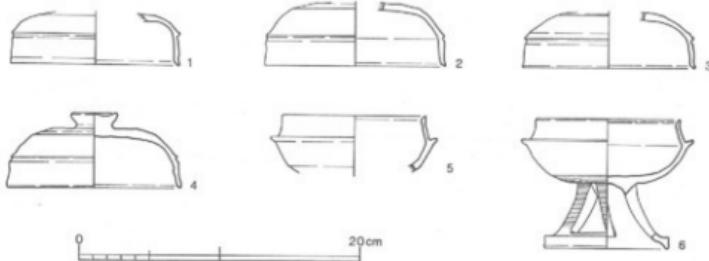
杯の杯部が2例、甕が5例である。杯蓋はすべて全体の半分以下しか残っておらず、高杯のうち1例は比較的原形を留めており、もう一方は杯身とも考えられるが、調整などから同様な例と判断した。甕は5例すべて口縁及び頸部を残してはいるけれど、底部までの形態がわかるのは1例のみである。

杯蓋は3例までつまみが確認され、稜がはっきりしているものの、稜直下は沈線状を呈するうえ、稜での直徑は口縁径に比べ若干小さくなっている。口縁端部は多少開きぎみである。4例はすべて口唇部平坦面が内傾し、小型という共通点を持つ。有蓋高杯は小型で丁寧なつくりで、スカシは3方であることが確認出来た。甕は5例すべて口縁部に凸帯を持ち、頸部は短く波状文を持たない。体部調整は外面にはタタキの様子を残しているが、内面は青海波文をほとんど消しているか、あるいはタタキを確認できないという特徴を持っている。

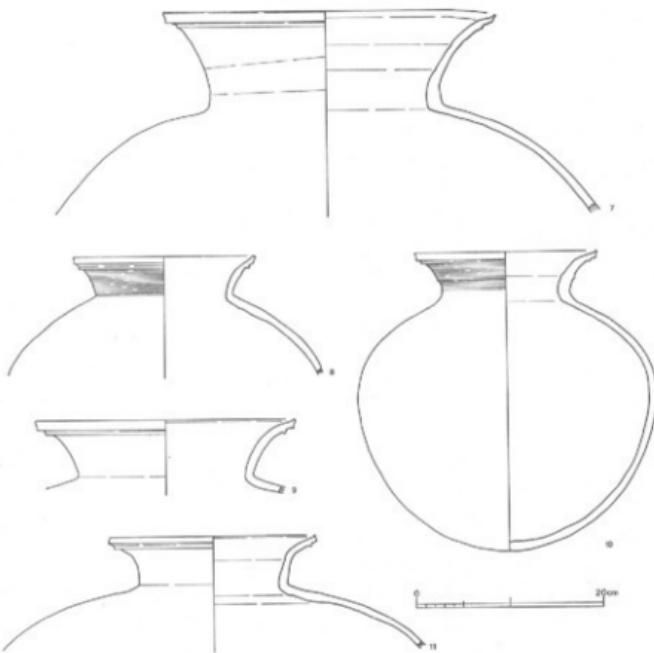
糞久山43号墳と似た古墳の調査報告例としては揖保川流域でも、龍野市長尾タイ山古墳群、揖保川町笠田古墳などがある。これらは主体部を明確に残しておらず、埴輪などの外表施設を持たず、むしろ削平されたりして墳丘も判然としない古墳であり、須恵器は周溝内から出土する特徴を持ち、横穴式石室での副葬のあり方とは異なる。遺物からみて、これらの古墳は横



第24図 土器出土状況



第25図 土器実測図(1)



第26図 土器実測図(2)

穴式石室導入以前の比較的近い時期であることも興味深い。

養久山43号墳から出土した須恵器は、杯蓋及び甌の特徴から判断して一時期の遺物と考えられる。揖保川流域での須恵器編年はこれまでに長尾・タイ山古墳群の報告の中にあり、それに準ずるとⅡ Cに相当するかと思われる。また陶邑古窯址編年のⅠ期5段階に相当し、実年代は6世紀前半を与えることが出来ると考えている。

参考文献 『山陽自動車関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 篠田古墳』1982 兵庫県教育委員会
 『長尾・タイ山古墳群』1982 兵庫県龍野市教育委員会
 『陶邑Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』1976~78 大阪府文化財調査報告書 第28~30輯 大阪府教育委員会



第27図 土器出土状況

土器名	法 量 (cm)	形 種	體	調 整	臍 土	燒成	色 色	調	備 考
1 推定值 口 横 径 高 横 径 高	12.0 11.9	口唇部が内傾する小型の壺 縁は、はつきりしているが、つまみの有無は不明。	天井部に回転ヘラケイリが みられるが方向は不明。他 は回転ナメ調整。	良好 密	天井部 口縁部 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 口縁部 内面	天井部 口縁部 内面	対称復原化
2 推定値 口 横 径 高 横 径 高	12.0 11.8	口唇部が内傾する。縁は、はつきりしてあり、つまみ の有無は不明。	天井部に反時計方向の回転 ヘラケイリ。時は回転ナメ 調整。	良好 密	天井部 口縁部 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 口縁部 内面	天井部 口縁部 内面	ク
3 推定値 口 横 径 高 横 径 高	12.8 12.6	口唇部が内傾し、縁は明瞭。 てつまみの痕跡がみられる。 全体のどちらかとセットと 考えられる。	天井部に回転ヘラケイリ、 輪郭部に回転ヘラケイリ。 天井部は不明。	良好 密	天井部 口縁部 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 口縁部 内面	天井部 口縁部 内面	ク
4 推定値 口 横 径 高 実測値 つまみ 径 高	12.3 4.9 3.5 0.9	縁が剥離でつまみを伴うち ら、要部が内傾する。	つまみは、はり付け、天井 部に回転ヘラケイリの方向 は不明瞭、内面口唇部は回 転ナメ調整。	良好 密	天井部 口縁部 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 口縁部 内面	天井部 口縁部 内面	ク
5 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	10.2	口唇部は丸味をおびている。 高杯の杯部と見えられる。	高部に回転ヘラケイリがみ られる。他の回転ナメ調整。	良好 密	断面 底全周	紫灰色 明灰色	外面部 口縁部 内面	断面 底全周	ク
6 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	10.2 9.2 4.6 9.1	口唇部が内傾し細い脚に 接する。杯底部にはスカッシュがある。	杯底及び脚部内面は回転ナ メを含む。脚部外表面はヘケ目調 整。杯底部は回転ヘラケ イリ。	良好 密 少々 少々	天井部 口縁部 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 頭部以上 内面	天井部 頭部以上 内面	ク
7 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	34.6	口縁部凸部をを持つ頸部に 接する。過渡文ではない。	頸部内面の凹心田字は消さ ない。頸部外表面は回転ナメ。少々 、口縁、頸部は回転ナメ。少々	良好 密	天井部 頭部以上 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 頭部以上 内面	天井部 頭部以上 内面	対称 図
8 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	19.4	7とはほぼ同じ凸部が明瞭で なく全体に小臺である。	頸部外面上にヘケ目を施す。 他の調整は7と同じ。	良好 密	天井部 頭部以上 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 頭部以上 内面	天井部 頭部以上 内面	ク
9 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	27.6	形態上の特長は8に似る。	頸部内面の調整は不明であ る。他の7と同様。	良好 密 多	天井部 頭部以上 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色 本色	外面部 頭部以上 内面	天井部 頭部以上 内面	ク
10 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	19.3 32.0 32.0	全体が推定できる頸部に一 本凸部が一束めぐる。	7と同じ。	良好 密 少々	天井部 頭部以上 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 頭部以上 内面	天井部 頭部以上 内面	ク
11 推定値 口 横 径 高 器 器 高 実測値 つまみ 径 高	22.0	形態上の特長は8に似る。	7と同じと考えられるが胸 部上面に同じ円文の痕跡は 見当たらない。	良好 密 少々 少々	天井部 頭部以上 内面	灰褐色 自然釉 青灰色 明灰色	外面部 頭部以上 内面	天井部 頭部以上 内面	ク

第2表 美久山43号墳出土土器調査表

5. 小 結

養久山43号墳は、養久山支尾根から北へ派生した支尾根のうちの東側の支尾根の鞍部に立地する古墳である。尾根幅の狭いやせ尾根で、支尾根そのものは比較的急斜面であるが、43号墳は平坦地と言っても良いような地点に位置している。東西の眺望はやや開けているが、北側は支尾根頂上に42号墳が立地しており、視界は遮ぎられている。南側も主尾根によって妨げられている。尾根上に立地しているものの墳丘墓とは異なる地域に築造されている。同一尾根・丘陵内に墳丘墓と古墳が混在する半田山においても後期の古墳である半田山3号墳は尾根から一段下がって地点に占地しており、同様の条件を備えている。

調査前の状況では、一見方形墳にも見えたが、流土を除去すると径11m前後の円墳であろうと考えられた。墳丘墓と違い、墳裾は明らかに手を加えられ、盛土も明瞭であった。鞍部に築かれていたため、墳裾部分には多量の流土が堆積していたが、除去すると墳丘は高く、裾からの最大高は1.2mを測る。盛土も最も残存しているところで0.8mを測った。墳丘構築は、一般の古墳と同じく基本的には2種の土を互層にして築いている。墳丘は残っているように思われるが、主体部は確認されなかった。墳丘中央部に擾乱層を検出したことにとどまった。盜掘痕かと思われるが、その時期を示す遺物は出土していない。埋葬主体は、全くの憶測であるが、石材が全く認められないこと、粘土も全く確認出来ないこと、尾根上の古墳であることなどを考え合わせれば、木棺直葬であった可能性が高く、そのように考えるのが最も妥当かと思われる。

墳裾にはほぼ円形の溝を有しており、北半に須恵器のみから成る土器溜を検出した。溝を有し、そこから須恵器を出土する古墳は周辺でも揖保川町大門の姫田古墳、揖西町長尾の長尾タイ山1号墳などが知られている。しかも主体部が削平され、出土遺物が溝内外は原位置を保っていない点や、溝で須恵器を使っての祭祀形態も共通する。時期も6世紀前半と同じで、同一性格の古墳である。揖保川中・下流域では、横穴式石室の採用は6世紀中葉の西宮山古墳に始まる。その前段階の古墳に養久山43号墳は相当する。後期の群集墳を引き起こす横穴式石室を主体部とする古墳の前段階の間隙を埋める資料の少ない時期の古墳として意義深い。長尾タイ山1号墳は、西宮山と同タイプの古墳の可能性もあり例外とすると、他の古墳は当墳と同じく遺物量が少なく、大きな開きがあり隔絶の感がある。西宮山古墳築造の画期を認めるとともに、本墳は養久山の尾根上の最終段階の古墳であり、埋葬の変化点にある古墳としての重要性が指摘出来る。この時期に揖西平野においても、政治的な力関係の変化があったのではないだろうか。

V おわりに

養久山42号墳を調査してから、2年以上の歳月が経った。初めて現地に立った時は、本当に墳丘墓なのかどうか判断に苦しんだ。外形観察からは、墳丘墓（古墳）と断定することは不可能ではあったが、最近調査が行われている但馬の古墳に比べると立地も良く、墳丘が僅かながらも認められ、十分に古墳と考えてもおかしくはなさそうであった。確認調査を実施するため伐採したところ、墳丘は低いながらも確認出来た。

調査は、秋の深まり始めた頃から初冬にかけて42号墳を、翌年の真夏日の日が続く暑い春に43号墳を調査した。共に1ヶ月前後の短い期間ではあったが、養久山を掘るということで重圧を感じた。養久山の持つ古墳発生を考えるにあたっての知名度から受けるもので、圧を感じながらも有意義な調査であった。

標題をはじめとして本文では養久山42号墳と呼称してきた。養久山42号墳と称するのが正しいのかもしれないが、若干のひっかかりを感じ駄然としないため42号墳と記した。ただ、「墳」とはしたが古墳であると考えているわけではない。そのため文中で墳丘墓と呼んでいる箇所もあり、混同しているようで複雑になっているが、現時点の心境で揺れ動いている段階のためである、位置と環境の章では、一般に呼ばれている名称を使った。

土器館に使われた土器からは、庄内式併行型と考えられるが、埋葬用の特殊な土器のため幅は生活用の土器よりは広いと思われる。棺身は、口頸部を意図的に打ち割っているため欠失している。が、今年度調査された養久山北東の独立丘陵である半田山の尾根上に立地する1号墓上に築かれた土器館の例からやや長い頸部がつくものと思われる。内面ヘラケズリがないことや頸部が直立するやや長いものであることなど古相を示す特徴が見られる。しかし、球形に近いプロポーションからは新しい要素を強く感じる。埋葬用の特殊土器として焼成されたものであろうから蓋と身は同時期のものとすれば、蓋は身以上に新しい様相を示している。高杯杯部と同じ作りであろう。古い要素も認められるが、新しい要素を見い出せれば新しい時期を与えるのが常道であろう。それゆえ、庄内期併行とするのが妥当と思われる。

土器型式から時期は推定されるが、これによってただに弥生時代、古墳時代に属すると決しきれない時期のため、今は断定し難い。この時期は、播磨地域では弥生時代末期に考える意見も多く聞かれる。前代の葬制を残していることから、妥当かと思われる。揖保川流域の墳墓を見てもその方が考え易い。

しかし、この時期の播磨の土器は複雑で小地域ごとに変化している。同時に長越遺跡では純粹の庄内式土器が搬入されており、集落の状況などからも時代の変化を感じさせる。そのため、養久山42号墳においても断定は避け曖昧な表現となつた。

3ヶ年に亘る発掘・整理調査の結果が本書である。小さな成果ではあるが、本書によって新たな成果の一つでも引き出して戴ければ幸いである。

図 版



養久山全景と振保川



養久山42・43号墳遠景（西上空から）



黄久山42・43号墳遠景（南東上空から）



黄久山42・43号墳遠景（東上空から）



黄久山42号墳全景



黄久山42号墳第1主体全景



菱久山周辺上空写真（国土地理院撮影）



長久山42・43号墳上空写真



養久山42・43号墳遠景（北西から）



養久山42・43号墳遠景（北西から）



養久山42・43号墳遠景（北東から）



養久山42・43号墳遠景（東から）



菱久山42・43号墳遠景（西から）



菱久山42・43号墳遠景（西から）



菱久山42号墳調査前



菱久山42号墳調査前



黄久山42号墳北側畦畔断面



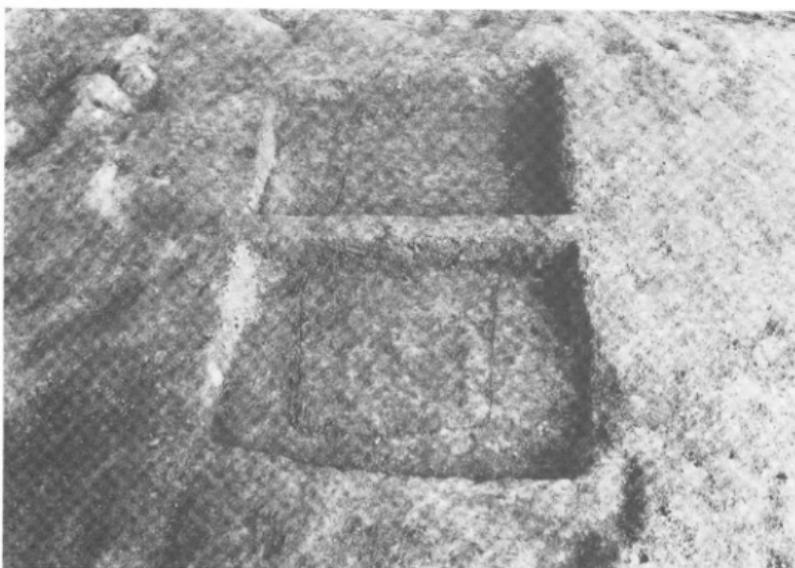
黄久山42号墳墻丘



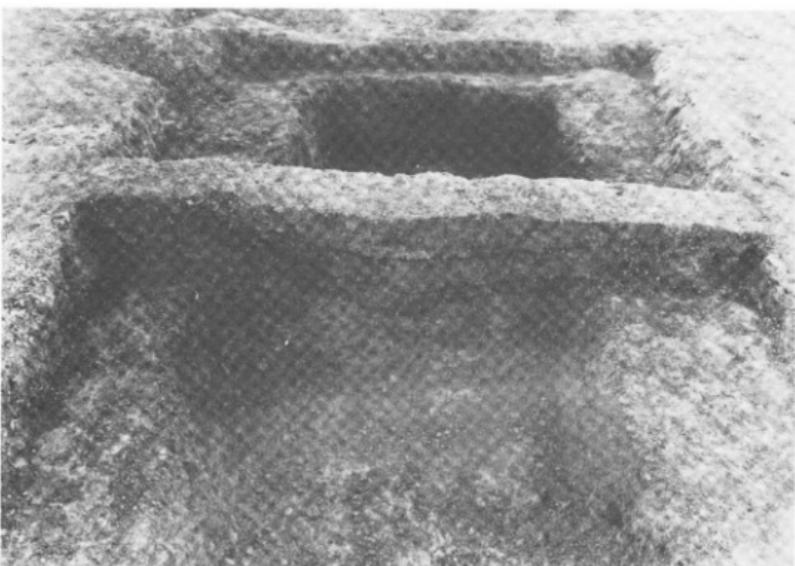
養久山42号埴埴丘



養久山42号埴埴丘



黃久山42號墳第1 主體棺槨出前



黃久山42號墳第1 主體橫斷面



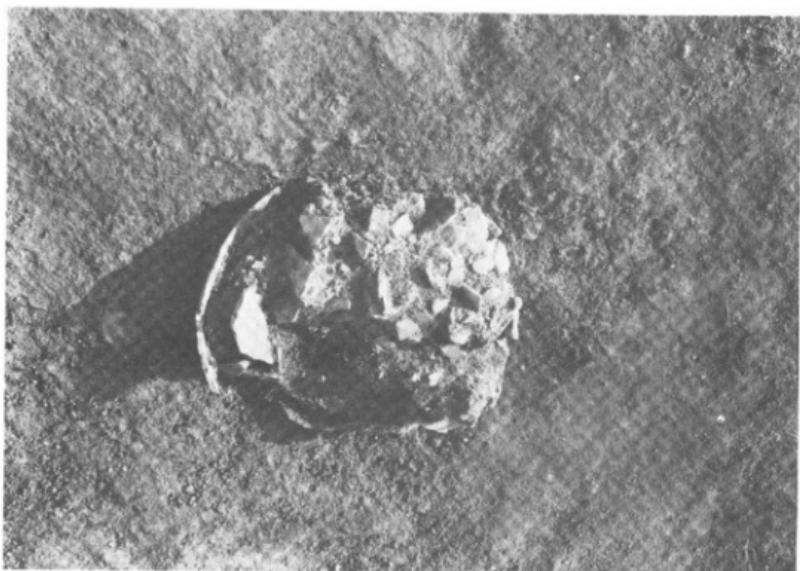
善久山42号墳第1主体全景



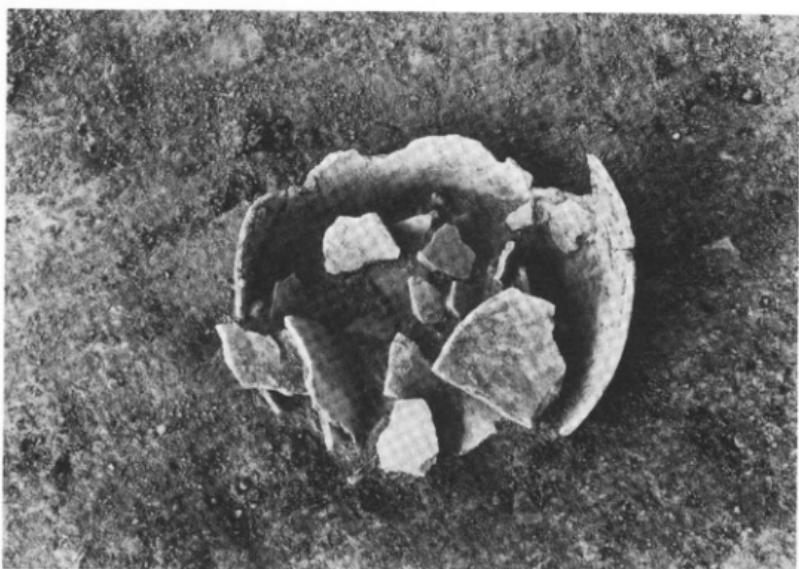
善久山42号墳第1主体断面



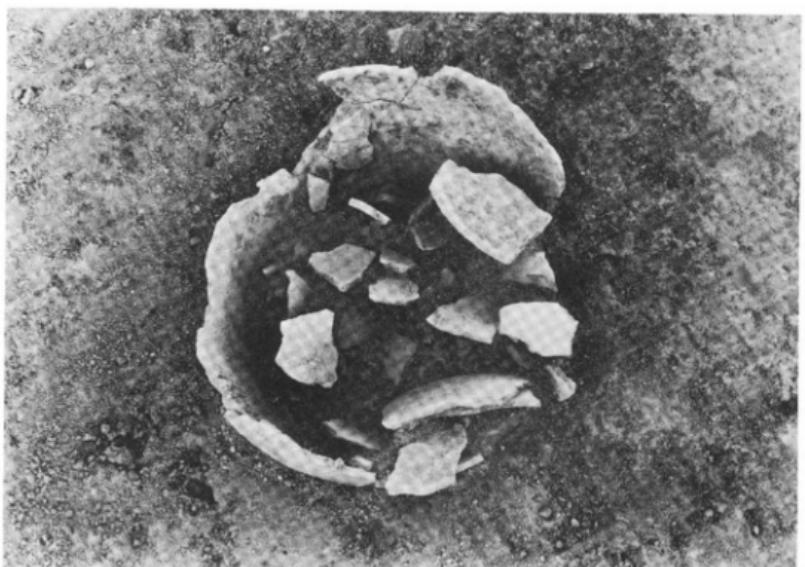
薺久山42号墳主体部の位置関係



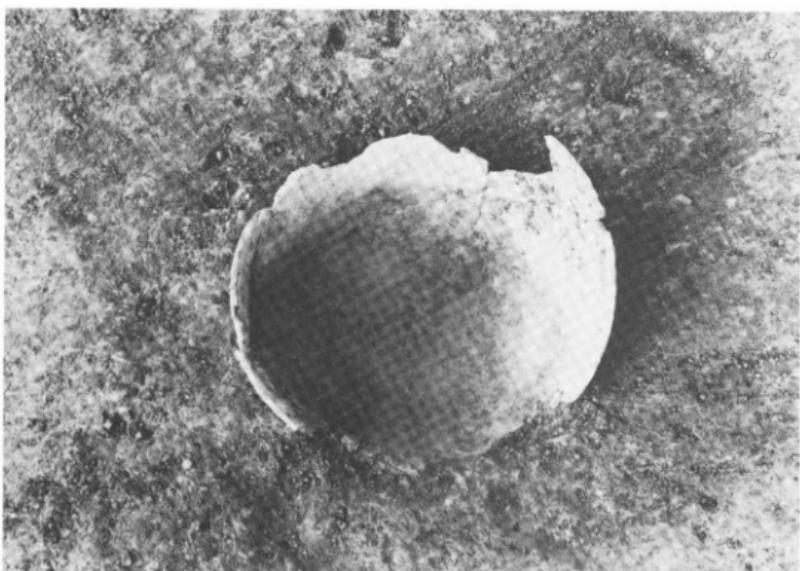
薺久山42号墳第2主体



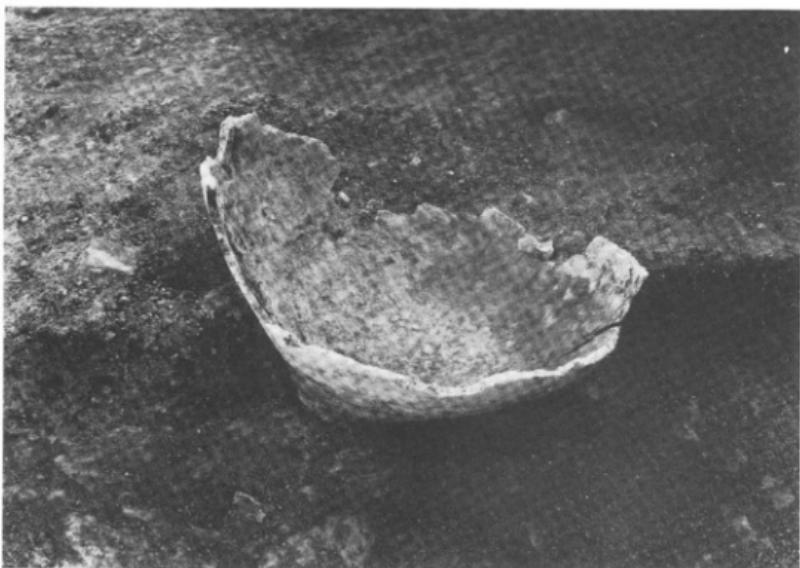
養久山42号墳第2主体



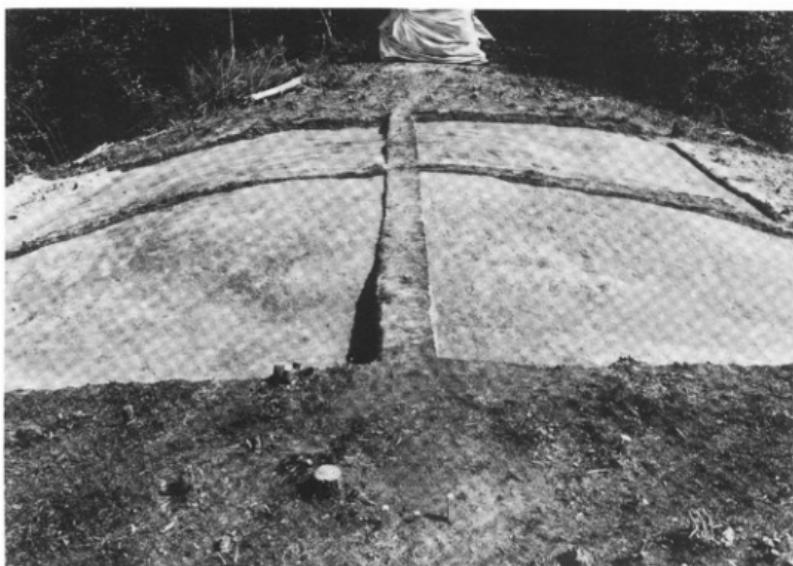
養久山42号墳第2主体



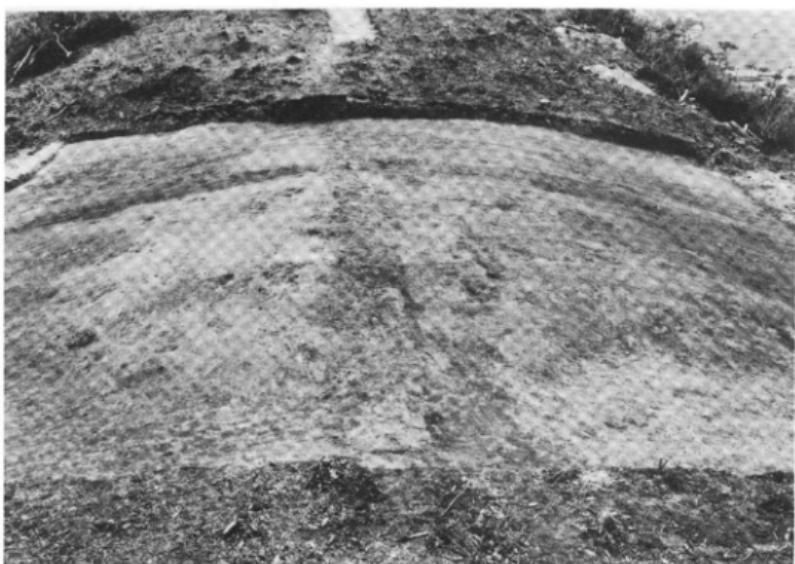
黄久山42号墳第2主体



黄久山42号墳第2主体



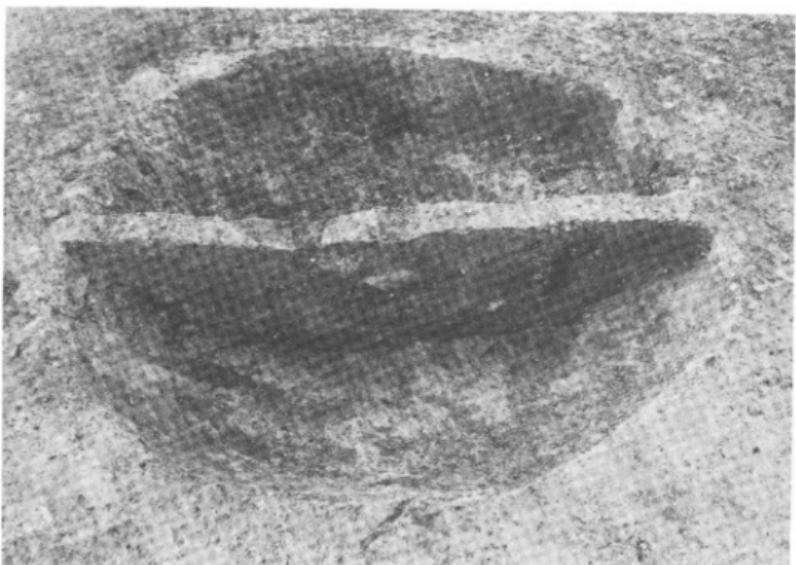
薺久山43号墳畦畔断面



薺久山43号墳墳丘



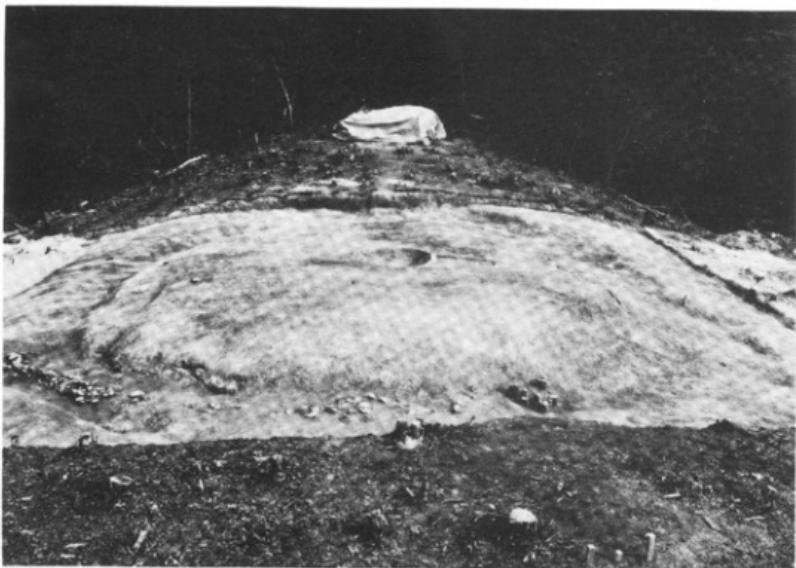
糞久山43号墳攪乱塙検出前



糞久山43号墳攪乱塙検出前



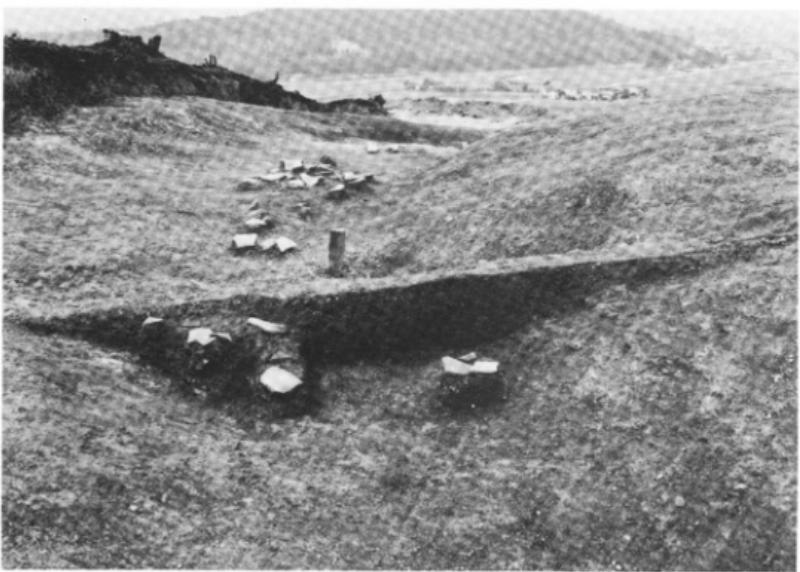
董久山43号墳全景



董久山43号墳全景



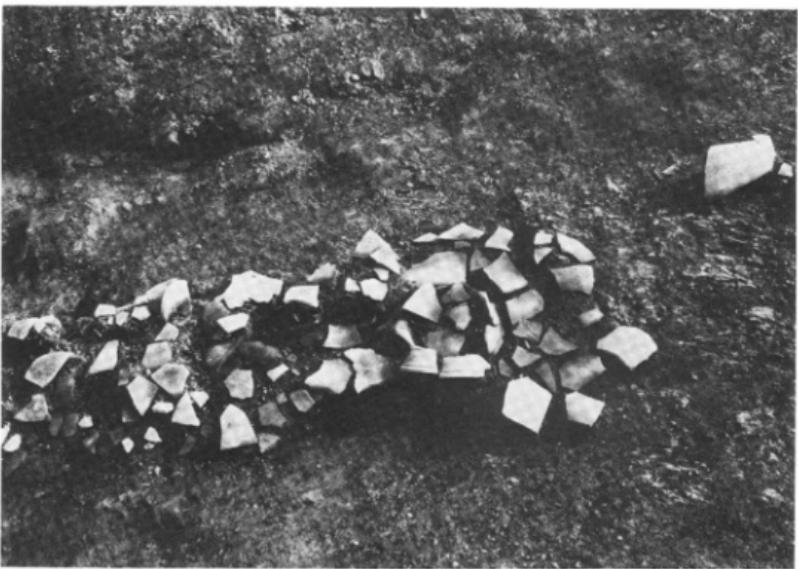
糞久山43号墳西侧畦畔断面



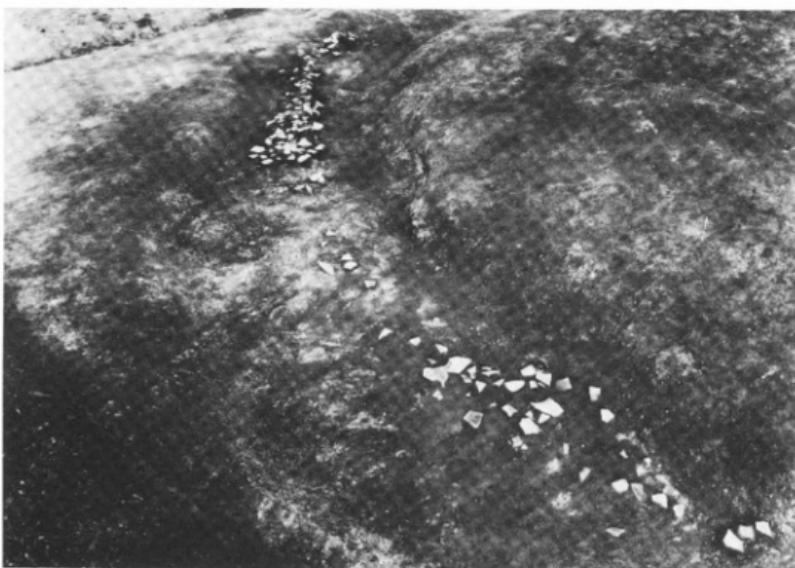
糞久山43号墳埴輪溝堆積状況



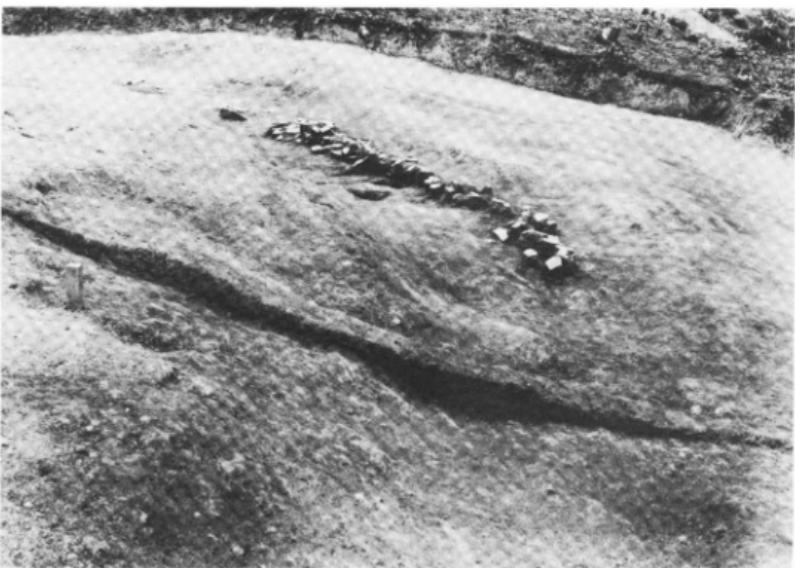
舞久山43号墳周溝土器出土状態



舞久山43号墳周溝土器出土状態



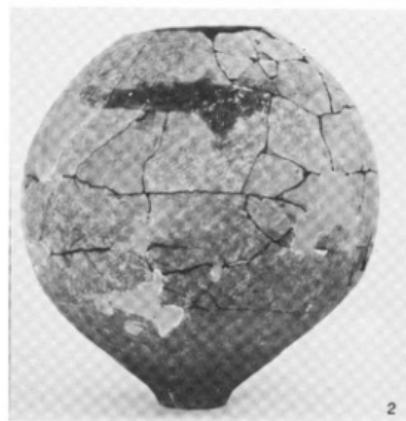
菱久山43号墳周溝土器出土状態



菱久山43号墳周溝土器出土状態



1



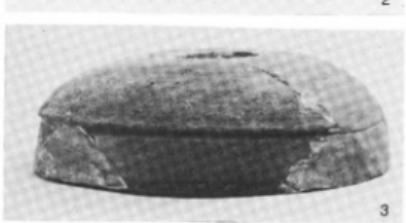
2



1



2



3



4



5

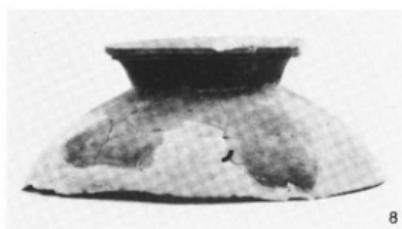


6

黃久山42·43号墳出土土器



7



8



10



11

姜久山43号填出土土器

兵庫県文化財調査報告書 第28冊

1985年3月31日 発行

養久山42・43号墳
—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ—

編集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL 078(341)7711

印刷 三ツ輪印刷工業株式会社
〒652 神戸市兵庫区淡町2丁目3-14
TEL 078(575)5153